

かさこじぞう (岩崎京子)

寺田 守

一 作者と作品について

作者の岩崎京子（一九二二〜）は、恵泉女子学園高等部を卒業後、一九四八年に「ローソク」を『少年少女』（中央公論社）に発表する。与田準一に師事し、一九五九年に「さぎ」で児童文学者協会新人賞を受賞した。その後、一九六三年に『シラサギ物語』（講談社児童文学新人賞）、一九七〇年に『鯉のいる村』（野間児童文芸賞、芸術選奨文部大臣賞）、一九七四年に『花咲か』（日本児童文学者協会賞）、二〇一〇年に『建具職人の千太郎』（赤い鳥文学賞）など多数の作品を発表し、賞を受けている。

「かさこじぞう」は民話を岩崎京子が再話して創作した作品である。大川悦生の依頼で一九六七年に絵本として刊行された。「笠地蔵」の民話は各地に見られるが、岩崎の「かさこじぞう」は、例えば「ふとかおを上げると、道ばたにじぞうさまが六人立っていました。」などの描写の表現が丁寧に描かれており、書き言葉の小説の特徴が見られる。教科書には昭和五二年度版小学校二年生用国語科教科書に初めて掲載された。現在の平成二三年度版教科書では四社（東京書籍、教育出版、三省堂、学校図書）に掲載されている。二年生の定番教材として広く扱われている。

二 叙述について

むかしむかし、あるところに、じいさまとばあさまがありましたと。

「むかしむかし」とあるので、はるか昔ということ。昔話の冒頭の決まった言い方なので、「かさこじぞう」は昔話として語られていることが分かる。「あるところに」とあるので、場所も特定していない。「ありました」とあり、格助詞の「と」があることで、引用や伝聞であることを表している。つまり話者の体験ではなくて、話者も伝え聞いた話をこれから語ろうとしていることが分かる。

たいそうびんぼうで、その日その日をやっとくらししておりました。

「たいそう」とあり、とてもや非常にという意味。財産や収入が乏しく、生活が苦しい状態が甚だしい。「やっと」とあるので、余裕がなくかろうじてくらししている。とくに毎日の食事は、その日の分をその日になんとか手に入れて過ごしていたのだろう。住む家はあるので、雨風はしのげていただろう。衣服はほとんどもっていなかっただろう。

ある年の大みそか、じいさまはためいきをいっていました。

「大みそか」は一年の最後の日。近世ではその年の借金を返す日でもあった。じいさまとばあさまはびんぼうではあるが、借金で苦しん



でいる様子はない。「ためいきをついて」とあり、失望して思わず大きな息をもらしたことが分かる。

「ああ、そのへんまでお正月さんがござらっしゃるといふに、もちこのようにもできんろう。」

「ああ」とあるが、強くがっかりした時にもらす言葉なので、ここのためいきをついた。「そのへんまで」とあるが、正月は暦なので近くの場合にすでに來ているわけではない。「お正月さん」とあり、正月を擬人化している。「ござらっしゃる」とあり、いるの尊敬表現でおいでになるという意味。じいさまは、翌日に正月となるということ、正月をまるで人間のように諭えており、こちらに向かつて近づいていて、すぐ近くまで來ていると言っている。「もちこ」とあるが、もちのこと。もちに親しみをこめた「こ」をつけている。「よいいも」とあるが、「も」は類似の事物が他に存在することを言外にほめかす意味があるので、かどまつやおそばやおせち料理などの様々な正月の準備はもちろん、もちこの用意でさえもできないと言っている。「のう」とあり、しみじみとばあさまに語りかけるように言っている。

「何ぞ、売るもんでもあればええがのう。」

「何ぞ」は、なにかという意味。「でも」とあるので、売るもんは軽い例示の意味となる。もちこを買うにはお金が必要で、お金があるのが一番望ましい。しかしお金がないことはじいさまも分かっているの、せめて何かを売ってお金を作ることができたら良いと考えた。

じいさまは、ざしきを見回したけど、何にもありません。

「ざしき」とあるが、畳を敷いているわけではなくて板間だろう。そこにわらやすげを渦巻状に円く平らに編んだ敷物を敷いて座った。「見回した」とあるので、一ヶ所を見たのでなくてざしき全体を見るために視線を動かした。じいさまたちはおそらくざしきにいるのだろう。ぐるっと自分の周囲を見た。「何にも」は何一つ、全くという意味。売るもんが何一つなかった。

ばあさまは土間の方を見ました。

「土間」は、床板を張らずに地面のままにしてあったり、三和土（たき）にしてあるところ。「方」とあるので、ざしきから土間の方向を見た。じいさまが今いる場所を見回したのに対して、ばあさまはとる距離のある土間の全体を見ることができた。

すると、夏の間にかりとおいたすげがつんでありました。

「かりとおいたすげ」とあり、「おいた」はあとのことを予想して前もってするという意味なので、何かに使うためにかりとったことが分かる。「すげ」はカヤツリグサ科の植物の総称。笠や蓑、縄を作る材料となる点ではわらと似ているが、わらが稲や麦の茎であり、食べるためのものの余った部分であるのに対して、すげは食べ物にはならない。

「じいさま、じいさま、かさこさえて、町さ売りに行ったら、もちこ買えんかのう。」

「じいさま、じいさま」とあり、じいさまに呼びかけている。すぐそばにいて、二人で会話をしている最中なのに、なぜばあさまは呼びかけたのだろうか。ばあさまはすげを見つけて、アイデアがひらめい

たので、発見を少し興奮してじいさまに伝えているのかもしれない。しかしたとえ興奮していたとしても会話中に目の前の人間を呼びかけるのは不自然である。ここでは呼びかけてじいさまの注意をひく必要があったのだろう。どのような必要だったのだろうか。じいさまはざしきを見直し続けていてばあさまから注意をそらしていたのかもしれない。また、ここまでの二人の会話は合わせても四回と短い、ゆっくりしゃべっていたり、発言と発言との間が長かったりして、時間が経過していたのかもしれない。いずれにせよじいさまの注意をひく必要がばあさまにはあったことがわかる。「町さ」とあるが、「さ」は格助詞「へ」と同じ意味で、町へということになる。「さ」は中世後期以降の東国の言葉で、現在でも関東以東の方言で使われる。じいさまとばあさまは関東より東に住んでおり、時代は中世後期よりも下ることが分かる。

おお おお、それがええ。

「おお おお」とあり、思わず漏れ出た言葉だと分かる。じいさまは、思ってもいなかったアイデアを聞いて、納得し、少し興奮している。「ええ」は良いということ。

そこで、じいさまとばあさまは土間に下り、ざんざらすげをそろえました。

「じいさまとばあさまは」とあるので、二人で作業をしている。「ざんざら」は音を表すオノマトペだとすると、ざらざらとすげをかき集める音を表しているといえる。また、ざんざら笠という言葉があり、編みあげたすげの先を切りそろえないでそのまま出した笠のことであ

るので、副詞のざんざらという意味で、長さがばらばらのまま茎の部分だけをそろえたと読めなくもない。ここではオノマトペと考えて、すげをかき集める音だと考えたい。

そして、せつせとすげがさをあみました。

「せつせと」とあり、二人が休まずに一生懸命に編んだことが分かる。おしゃべりしながらのんびりかさを編むのではなく、集中して黙々と作ったのだろう。

かさが五つできると、じいさまはそれをしよって、「かえりには、もちこ買ってくるで。にんじん、ごんぼもしよってくるで。う。」と言うて、出かけました。

「五つ」とあるが、半日もかからずに笠を五つ作れたことから、二人がそれだけせつせとあんだということがわかる。また、普段から笠を編むことには慣れていて、手際よく編む技術を持っていたということが分かる。「わらぐつの中の神様」のおみつさんは一生懸命編んだが技術は心許ないもので、できあがったわらぐつも不格好だった。しかし、じいさまとばあさまの笠は、おそらく不格好なものではなく、きちんと作られていたのだろう。「しよって」とあるので、背中にのせた。「かえりには」とあり、「は」が対比の働きがあるので、いきにもちこを買うことはできないが、かえりには笠を売ってお金を作って買ってくると言っている。「くるで」の「で」は、接続助詞の「で」とすると「ので」という意味となる。そうすると、後に続く言葉を省略している言いさし表現ということになり、「ので、楽しみに待っていてくれ」というような言葉が続くことが分かる。あるいは、終助詞の方言「で」

だとすると、「ぜ」「ぞ」「よ」の意味となる。そうすると、じいさまは「買ってくるぜ」「買ってくるぞ」「買ってくるね」と言っていることになる。「ごんぼも」とあるので、もちこに加えてにんじんやごんぼを加えて買ってくると言っている。

町には大年の市が立っていて、正月買もんの人で大にぎわいでした。

「大年の市」は、大みそかに多くの人が集まって物を売買する場所のこと。京都の錦市場のようなイメージだと思われるが、現在の錦市場のような常設の店ではなく、定期的に店が並んだ。「大にぎわい」とあるので、人が大勢出てとても活気があるという意味になる。年末の錦市場のようなにぎわいだろうか。

うすやきねを売る店もあれば、山からまつを切ってきて、売っている人もいました。

「うすやきね」は、もちをつく道具なので、年が明けて正月に食べるもちこの準備のために大みそかに買う人がいるのだろう。「まつ」は、輪飾りや門松に使う材料なので、年が明けて正月に家に飾るために大みそかに買う人がいるのだろう。「店も」「人も」とあり、類似するものをいくつか並べているが、いずれも年が明けて正月の準備のためのものを売っている。

ええ、まつはいらんか。

「ええ」とあるが、いわゆる無意味語やファイラーと呼ばれる。無意識に使う口癖のような言葉だが、ことばの選択や話の組み立てを考える時間を作ったり、話の前触れとして使ったりする。また、話者から

すると、母音ではじまるファイラーは発声がしやすく、声を出す時に何を話すにせよ最初に言うことで流暢に話し始めることができるという働きもある。ここではまつを売る人が、大きな声でかけ声を出しやすくするために「ええ」という言葉をまず発したのだろう。

じいさまも、声をはりました。

「じいさまも」とあるが、「も」が他にも似たものがあることをほめかす意味があるので、まつを売る人の声もはり上げていたことがわかる。「はり上げました」とあるので、声を強く大きく出した。大勢の人でにぎわっている市で、聞き取ってもらうために大きな強い声を出した。

ええ、かさやかさやあ。

「かさや」とあるが、「や」の意味がいくつか考えられて難しい。「かさ屋」と言っているのかもしれないが、じいさまはかさを売ることが生業にしているわけではないので、かさ屋と名乗るのは不自然であるように思われる。また、断定の「だ」「じゃ」の変化した「や」という意味で、「(これは)かさや」と言っているのかもしれないが、これは関西方言なので、じいさまが関西人でなければ考えにくい。ぶつきらぼうすぎて、じいさまの人物像とも合わない。さらに、疑問や反語の可能性もあるが、疑問や反語を言う状況でなく不自然なのでこれは考えにくい。そこで、ここでは歌謡に用いられる囃子詞のような「や」だと考えたい。意味はとくに無く、語調を整えるために「や」を間に用いているのだろう。

けれども、だれもふりむいてくれません。

「だれも」とあり、「もくません」で全面的な否定となるので、だれ一人としてふりむかなかった。あまり注目を集めなかったのではなく、一人としてふりむかず、相手にされなかった。声をはり上げたが、買物客に届かなかったのか、それとも声は届いていたがかさを買おうとする人が一人もいなかったのか、どちらともとれる。前者だとすると、じいさまは年寄りなので、声をはり上げたが、自分で思ってるほど強く大きな声が出ておらず、雑踏の騒音にかき消されたのだと考えられる。後者だとすると、正月の買い物に来ている人たちの中で、じいさまが場違いな商売をしようとしているのだということになる。「くれません」とあるので、ふりむきません、との違いを考えると、「ふりむいてくれません」は、ふりむいて欲しいと思ってるじいさまの気持ちに人々が答えることなくふりむかなかった、という意味が分かる。「世界一美しいぼくの村」のヤモもバグマンのさくらんぼを売ろうとして「でも、だれもふりむいてくれません」という状況に向き合った。ヤモもがっかりして道ばたにすわりこんだが、小さな女の子が買ってきてくれたのをきっかけに売れ始めた。「わらぐつの中の神様」のおみっさんも、わらぐつが売れずにがっかりしてあきらめそうになったが、大工さんが目にとめて買ってしてくれた。しかしじいさまのかさ売りでは、呼び水となるようなお客さんも、価値を認めてくれるようなお客さんも現れない。

しかたなく、じいさまはかえることにしました。

「しかたなく」とあるので、どうにもならないので、という意味となる。かさを売りにきたが、だれもふりむいてくれないので、売る方

法がなく、どうにもならなかった。じいさまはあきらめた。「かえることにしました」とあるので、かえりました、と異なり、まだ帰っていない。帰ろうと心で決めた。すぐ帰ったわけではないが、声をはり上げることは、もうしていないだろう。しばらくぼんやりして買ってくれる人が現れるのを待っていたが、まったく売れないので、帰ろうと心に決めて、片付けをはじめた。かさを重ねて、背負った。

年こしの日に、かさこなんか買うもんはおらんのじゃろ。

「なんか」とあるので、かさを例として取り上げて、軽んじて扱っている。じいさまも年こしの日にかさを買う人はいないと判断して考えている。きつとじいさまも年こしの日にかさを買うことなどこれまで的人生でなかったのだろう。「じゃろ」は、だろう、ということ、推測の意味になる。じいさまは、かさが売れない本当の理由は分からないが、きつと日にちが悪いのだろうと想像している。

ああ、もちこももたんでかえれば、ばあさまはがっかりするじゃろう。

「ああ」とあるが、強くがっかりした時にもらす言葉。もちこの用意もできないとためいきをついた時と同じ言葉なので、ここでもためいきをついたのだろう。「も」とあるので、もちこはもちろん、にんじん、ごんぼも買えないことをがっかりしている。「がっかり」は、思い通りにいかずに元気をなくす気持ちを表すので、かさが売れてもちこをじいさまが買ってくると期待しているばあさまが、期待がはずれて元気をなくすだろうと考えている。「ああ」とじいさまもがっかりして

いるが、かさが売れないことそのことよりも、ばあさまをすっかりさせる結果になったことに、がっかりしている。

いつのまにか、日もくれかけました。

「いつのまにか」とあり、いつか知らないうちに、ということなので、日がくれかけるのをじいさまは初めて気付いた。それほど必死になつていたことがわかる。では、何に夢中になつていたのであるか。声をはり上げてかさを売ろうと必死で気付かなかつたのだろうか、それとも、かえることにしてから、ばあさまはがっかりするじやろうかと、片付けながら考え込んでいて気付かなかつたのだろうか。声をはり上げて必死で気付かなかつたのであれば、この一文の位置は声をはり上げるのをやめた直後になればおかしい。ここでは声をはり上げるのをやめた後でも、ばあさまのことを考えこんで日を見ることがせずに気付かなかつたと考えたい。「くれかけました」とあり、くれました、との違いを考えると、「くれかけました」ではまだ日が完全にはくれていないことがわかる。少しずつ日がくれそうになり、暗くなつてきたのだろう。室内にいと、くれかけるのに気付くことは難しいが、じいさまは外でかさを売っていたので、日がくれかけていることに気づいた。暗くなる前に家に帰らなければならぬのだから。「日も」とあるが、「も」は「日は」や「日が」と異なり、他に似たものがあることを言外にほめかす意味があるので、日以外にもくれかけていることがわかる。だが、他に何と比べているのか、難しい。じいさまがかえることにしたことに合わせてちょうど日もくれかけたのか、長い時間かさを売っている間に日もくれかけたのか、それともじいさまががっかりして気持ちが暗く落ち込んだのと同じように日も

くれかけたのか。一見いずれでも良いように思われるが、最後のじいさまの気持ちと連動していると読むのは、人間の気持ちにあわせて日はくれないので、じいさまの気持ちによりそいすぎているように思われる。「くれかけているようでした」といった「ように」という言葉が入れば最後の解釈も成り立つが、ここでは自分の気持ちと同じように日もくれかけているとじいさまが判断していると考え手がかりはない。

じいさまは、とんぼりとんぼり町を出て、村の外れの野っ原まで来ました。

「とんぼりとんぼり」とあり、元気なく寂しそうに歩く様子のとぼとぼと似ている。とぼとぼと「とんぼりとんぼり」を比べると、後者は動作がゆっくりしている様子が想像できる。落ち込んで歩く速度もゆっくりになつていよう。村の外れ」とあるが、「外れ」は、村の中心から離れている所や、村のすぐ外側の所を示すので、村の中とも外ともいえない境界のあたりということになる。じいさまの生活範囲の境界だろう。

風が出てきて、ひどいふぶきになりました。

「風が」とあり、「風も」と比べると、すでに雪がふついている状態で、加えて新たに風が出てきたことがわかる。おそらく大年の市でかさを売っている時から雪はふついていたのだろう。「ひどい」とあるので、強い風という意味で、横なぐりの強い雪がふきはじめた。「ふぶき」は、強い風と一緒に激しく降る雪のことなので、雪の量もふえたのだろう。

ふとかおを上げると、道はたにじぞうさまが六人立っていました。

「ふと」とあり、特に理由もなく、意識してやったわけでもないという意味なので、じいさまは偶然かおを上げた。「かおを上げると」とあるので、じいさまは下を向いていた。ふぶきは、ただ雪が横なぐりにふつて顔にあたるだけでなく、すでに積もった雪を風で舞上げて視界を悪くするので、じいさまは下を向きながら歩いていた。「道はた」は道のはしの方のこと。六体でなく、「六人」とあることから、じぞうさまを人間のように見ている。この文は地の文だが、じいさまの目を通して描かれているので、じいさまがじぞうさまを人間のように見ていると分かる。

おどろはなし、木のかげもなし、ふきつさらしの野っ原なもんで、じぞうさまはかたがわだけ雪にうもれているのでした。

「おどろ」は神仏を祭る建物のこと。「木のかげも」とあり、「も」が似たものを並べる意味があるので、おどろがないだけでなく、おどろと同じように雨風や雪をしのげる木のかげさえないとじいさまが考えていることが分かる。「ふきつさらし」は、さえぎるものがなくて、風が直接あたる場所のことなので、おどろや木がないと他に風をさえぎるものが何もない場所だと分かる。「かたがわだけ」とあるが、「だけ」とあるので、反対側はうもれておらず、ふぶきになってからかたがわがうもれたことが分かる。風がでる前から雪はふつていたが、うもれるほどの量はふつていなかった。「うもれて」とあり、雪がおおいかぶさって見えなくなることなので、じぞうさまのかたがわは雪で見えない状態となっている。「いるのです」とあり、いましたと比べてみると、「いるのです」は「のだ」文なので発見的な断定をしている。

つまり、じぞうさまの状態をじいさまが気づいて注目した。じぞうさまのいる場所は村の外れであり、じいさまはじぞうさまを初めて見たわけではないだろう。それにも関わらず、おどろがないことをまるで初めて知ったかのようにじいさまが注目している。おそらく、じいさまはこのじぞうさまがここにいることを知ってはいたが、ふぶきの中の状態を見たことがなかったのだので、これまでふきつさらしの状態にあることに気をとめてこなかったのではないだろうか。

おお、お気のどくにな。

「おお」とあるので、思わず漏れ出た言葉だと分かる。じいさまは、ふきつさらしのじぞうさまを見て、思わず心が動いている。「お気のどく」とあり、相手の困難な様子に同情して心を痛めることなので、じいさまはじぞうさまに同情している。「な」は、感動や詠嘆の意味の終助詞なので、気のどくだとしみじみと感じている。

さぞつめたかろうのう。

「さぞ」とあり、他人の感情を想像して、きっとこうだと思いやる意味なので、じいさまがじぞうさまがつめたいと思っていると同情していることが分かる。ここではじぞうさまに触るとじいさまがつめたく感じるだろうという意味ではない。

じいさまは、じぞうさまのおつむの雪をかきおとしました。

「おつむ」は頭の幼児語なので、じぞうさまを子どものように見ている。「かきおとし」とあり、とがったもので表面についているものをこすって落とすことなので、じいさまは指を立てて、雪をかくように

落とした。払い落とすが手の平でさっさとする動作なのと異なると、厚みのある雪に指をさして、ひっぱるように落とす動作となる。

それから、このじぞうさまはどうじゃ。

「それから」とあるので、ほおべたにしみをかきたてじぞうさまを見た後で、次のじぞうさまに目を向けた。「どうじゃ」は「どうだ」といった意味だが、通常「どうだ」は、「どうだ、参ったか」のように、相手に呼びかけて、考えや様子を尋ねる時に使う。しかしここではじいさまは一人であり、独り言となっている。じぞうさまの様子は見たら分かり、原因もふぶきだと分かるのだが、まるでじぞうさまに「どうした？」と話しかけるように声をかけている。

じいさまは、ぬれてつめたいじぞうさまのかたやらせなやらをなでました。

「つめたい」とあるが、ここでつめたく感じたのはなでるじいさまとなる。「かたやらせなやら」とあり、あれこれと並べて挙げている。「やら」は本来不確実であることを意味する言葉なので、ここでもかたと背中だけでなく色々なところをなでたのだろう。「なでました」とあり、手の平を軽くすべらせる動作となるが、かきおとす動作が雪を落とす目的だったのに対して、「なでました」が何のためにじいさまが行ったのか謎めいている。雪を落とすためではないだろう。ぬれてつめたいじぞうさまを、じいさまがわざわざなでるのは、咳込んでいる人の背中をなでるように、あるいは寒くて震えている人のつめたくなつた手をなでるように、相手を思いやってやさしく接する動作なのだろう。

このかさをかぶってください。

「このかさ」とは、売ってもらったかさを買おうとばあさまと二人で編んだかさのこと。「ください」はください、という意味になる。じいさまはじぞうさまに話しかけている。じぞうさまを思いやり、なでている間にこのアイデアをひらめいたのだろう。

どうしても足りません。

「どうしても」とあり、どんな方法を使ってもという意味なので、じいさまはあれこれ考えてみた。かさを二つに分けることはできないし、石でできて重いじぞうさまを動かすわけにもいかないの、一つのかさを二人のじぞうさままで使うこともできない。じいさまがそばにずっといることもできないので、時間をおいて交互に使ってもらうわけにもいかない。

じいさまは、じぶんのつぎはぎの手ぬぐいをとると、いちばんしまいのじぞうさまにかぶせました。

「つぎはぎ」は、衣服のほころびに布をあてて繕ったものなので、じいさまの手ぬぐいは新品でなく、色々なところにほころびができるほど使い込んでいることが分かる。じいさまはびんぼうなので、手ぬぐいも新しいものを簡単に手に入れることも難しいだろう。かさとちがつて、自分たちで作ることもできないので、かさよりも大切な生活に必要なものだといえる。

「これでええ、これでええ。」

「ええ」は良いという意味なので、じいさまは6人のじぞうさま全員にかさや手ぬぐいをかぶせることができ、良いと満足している。

そこで、やっとあんしんして、うちにかえりました。

「やつと」とあり、時間が長くかかったり、いろいろな障害を乗り越えたりして苦労した後に安心したということが分かる。雪をかきおとしたり、なでたり、かさをかぶせたり、てぬぐいをかぶせるのに時間を大分費やしたのだろう。また、雪をかきおとしたり、かさの数が足りなかったり、困難を解決するのにも苦労したのだろう。「あんしん」とあるので、じいさまは心配がなくなり心が落ち着いた。

さぞつめたかったらうの。

「さぞ」とあり、他人の感情を想像して、きっとこうだと思いやる意味なので、ここもばあさまがじいさまがつめたいと思っていたと同情していることが分かる。じいさまがじぞうさまにかけた同じ言葉を、ばあさまもじいさまに対してかけていることから、じいさまのじぞうさまに対する思いやりと同じような思いを、ばあさまがじいさまに抱いていることがわかる。まずかさが売れたかどうか聞くのではなく、「つめたかったらうの」と思いやっている。

かさこは売れたのかね。

「ね」とあり、尋ねる気持ちを表す終助詞なので、やはりばあさまもかさが売れたかどうかは気になっている。「売れたのか」でなく「売れたのかね」とあるので、売れたかどうかの事実だけをぶつきらぼうに聞いたですような聞き方でなく、私も気になっているという気持ち

を出してやさしく尋ねている。

「それがさっぱり売れんどのう。」

「それが」とあるが、「それ」は直接にはかさを指すが、単にかさがさっぱり売れなかった、という意味だけでなく、ここでは、ところが、というような意味になる。「さっぱり」とあり、全くとかちつともという意味で、全否定の意味となる。あまり売れなかったのではなく、一つも売れなかったと言っている。

じいさまは、とちゅうまで来ると、じぞうさまが雪にうもれていた話をして、「それでおら、かさこかぶせてきた。」と言いました。

「とちゅうまで来ると」とあるが、とちゅうまで来るとうもれていたのか、とちゅうまで来ると話をしたのか、どちらの意味ともとれる。前者だと、じいさまは「途中まで来るとじぞうさまが雪にうもれていた」という話をしたということになり、じいさまの体験を説明していることになる。後者だと、じいさまは蓑を脱いだり、雪を払い落としたり、片付けをしたりしながら座敷のほうに歩いているとちゅうで、(じぞうさまが雪にうもれていた)という話をしたことになる。「おら」は、もともとは男性が自分のことを指すぞんざいな言い方だが、女性も使うようになる。

すると、ばあさまはいやなかおひとつしないで、「おお、それはええ」とをしなすった。じぞうさまも、この雪じゃさぞつめたかろうもん。さあさあじいさま、いろいろに来て当たってください。」

「いやなかおひとつしなない」は慣用句として、いやがらない、面倒

臭がらないという意味になる。ばあさまはかさを売ってもちを買って
くると思っていたのだから、かさを手放したことに嫌な思いをするだ
ろうという話者の予想がわかる。「じぞうさまも」とあり、「も」とあ
ることで、じいさまがつめたかっただろうし、加えてじぞうさまだっ
てつめたかっただろうと言っている。やはりじいさまのことを心配し
ている。「いろいろに来て」とあるが、「来て」であり「行って」ではな
いので、ばあさまはいろいろのそばに座っていることが分かる。ばあさ
まはじいさまがじぞうさまにしたのと同じように心をくぼっているが、
じいさまのそばによってなでたりはしていない。

じいさまは、いろいろの上にかぶさるようにして、ひえたからだをあた
めました。

「かぶさるように」とあるので、上に覆い重なるような姿勢をとっ
た。「ように」とあるが、ここでは喩えの「ように」の意味だろう。実
際にいろいろの上にかぶさるとやけどをしてしまうので、まるでかぶさ
るかのような姿勢でいろいろにあたった。つまり、いろいろのそばで背中
を曲げて丸まったような姿勢で火にあたった。

やれ やれ、とうとうもちこなしの年こしだ。

「やれやれ」は疲れた時やがっかりした時に発する言葉なので、じ
いさまはもちこを手に入れる目的が果たせずに疲れ、がっかりしてい
る。「とうとう」は最終的な結果が実現したという意味だが、予想して
いたとおり実現してしまったという話者の思いも感じられる。じいさ
まは、年こしにせめてもちこを用意しておきたかったが、うまくいか
ずやはりもちこのない年こしになってしまったと感じて、がっかりし

ている。

そんならひとつ、もちつきのまねごとでもしようかのう。

「ひとつ」は、副詞で思いあたって新しい試みをしようとする気持
ちを表している。ちよつとといった意味。「まねごと」は形だけ似せて
することなので、もちつきの動作だけをしようとしている。「でも」は、
「お茶でもどう？」のように一例として挙げるという意味と、「彼でも
間違える」のように極端な例を挙げて他の場合はもちろんだという意
味がある。ここでは「ひとつ」という言葉からも前者だろう。じいさ
まは、もちつきのまねごとでなくても年こしの雰囲気味わえるなら
なんでもよかった。

すると、ばあさまもほほとわらって、あわの もちこ ひとうす ばっ
たらと、あいどりのまねをしました。

「ほほと」は軽く笑う声であるが、「あはは」よりも上品な笑い方が
連想される。唇をすぼめるような笑い方で、手を口にあてている様子
が想像できる。「あわのもちこひとうすばったら」は先のじいさまの「米
のもちこひとうすばったら」と呼応して、もちつきのかけ声を表して
いるのだろう。「あいどり」は方言で餅つきの際の手を入れてこねる作
業のこと。「あわの（あいどり）もちこ（あいどり）ひとうす（あいど
り）ばったら（あいどり）」や「あわのもちこ（あいどり）ひとうすば
ったら（あいどり）」といったタイミングで手を出すことも考えられる
が、これはばあさまにしては非常に素早い動作になるので、「あわのも
ちこひとうすばったら（あいどり）」とかけ声の後に一回手を出す動作
になるのだろう。

それから、二人はつけなかみかみ、おゆをのんで休みました。

「つけな」は漬け物にした菜のことで、白菜、蕪などのこと。「かみかみ」とあるが、何度も噛むという動作や、噛みながらおゆをのむという動作が想像できる。いずれにしてもすぐに飲み込んでしまわずにしばらく噛みながら口の中に残していたのだろう。じいさまとばあさまにとってつけなはいくらでも食べられるものではないはずだ。だからつけなで空腹を満たすのではなくて、少量のつけなの塩味や食感とともに、おゆをたくさん飲んで、おゆで空腹をごまかしていたのではないだろうか。「休みました」は休憩したという意味ではなくて眠ったということ。おゆをのんだ後でじいさまとばあさまは寝ることにした。

すると、真夜中ごろ、雪の中を、じいやす、じいやすと、そりを引くかけ声がしてきました。

「真夜中」は夜が一番更けた深夜のこと。二人はすでに眠っていただろう。「じいやすじいやす」はかけ声であるので、うんとこしよどっこいしよのように複数人が引つ張るタイミングを合わせる声だろう。だから「じいやす（引つ張る）じいやす（引つ張る）」という動作になる。かけ声をかけなければ引けないくらいそりが荷物でいっぱい重いことが想像できる。「きました」とあるので、大きなかけ声が突然聞こえたわけではなく、だんだんと遠くからかけ声が聞こえはじめ、徐々に近づいて、大きな声になっていく様子。

耳をすまして聞いてみると、六人の じぞうさ かさこ とつて かぶ
せた じいさまの うちは どこだ ばあさまの うちは どこだと歌っ

ているのです。

「すまして」は一つのこと気持ちを集中して注意を向けることなので、じいやすというかけ声に注意して聞いた。「みると」とあるので、意識してよく聞いた。「じぞうさ」の「さ」は格助詞「へ」と同じ意味で、じぞうへ、じぞうにといった意味になる。「いるのです」とあり「いました」との違いを考えると、「いるのです」は耳をすまして聞いたことで初めて聞き取れたということが分かる。

「じいやすじいやす」というかけ声と「六人のじぞうさどこだ」という歌は同時に聞こえたわけではないのだろう。かけ声のあと歌を歌い、またかけ声にもどるという一連の声だったのだろうと想像できる。「うちはどこだ」と言っているので歌っているじぞうはじいさまのうちの場所を知らないようだ。

そして、じいさまのうちの前で止まると、何やらおもいものを、ずっさん ずっさんと下ろしていききました。

「何やら」は実体はつきりせず断定はできないけれども判断したところという意味なので、じいさまは何が起こっているのかはつきり分かっていないけれども重いものを下ろしていることは分かった。「いきました」とあるが、下ろしてから去って行ったという複合動詞の意味と、どんどん下ろしはじめたという補助動詞の意味がある。どちらの意味でもとれるが、前者だとすぐに荷物を下ろし終えたことになる。ここではたくさんさんの荷物があるので、後者の意味だととらえたい。

じいさまとばあさまがおきていつて、 雨戸をくると、 かさこをかぶった
じぞうさまと、手ぬぐいをかぶったじぞうさまが、 じいやす じい

やさど、空ぞりを引いて、かえっていくところでした。

「くる」は繰ると書き、順に送り動かすこと。雨戸を横にスライドさせて開ける動作のこと。「手ぬぐいをかぶったじぞうさま」はじいさまの手ぬぐいをかぶったじぞうさまのことなので、ここでかさこをかぶせてあげたじぞうさまたちだとじいさまとばあさまは理解した。

「じいやさじいやさ」とかけ声をかけているが、荷物を下ろしているのもそれは軽いはずである。歌の一部として、はやしのようにかけ声を出しているのかもしれない。

のき下には、米のもち、あわのもちのたわらがおいでありました。

「には」とあり、「に」と比べると、のき下以外のところにはないという対比の意味が読み取れる。つまりじいさまは、荷物のなくなった空ぞりとたわらのあるのき下を見比べて、何が起こったのかを理解した。「たわら」とあるのでわらなどで作った袋のこと。米のもち、あわのもちと中身が分かっているのに、密封されているのではなく、少し中も見えるのだろうか。

じいさまとばあさまは、よいお正月をむかえることができましたと。

「よいお正月」とあるが、冒頭でじいさまは「もちこのようにもできのう」とためいきをつけているので、もちやそのほかの食べ物の用意ができて正月を迎えることができたことを「よい」と判断していることがわかる。じいさまとばあさまがもらったものは、お金や財産ではなくて数週間から数ヶ月でなくなってしまうもちや食料、おかさりである。この正月はよいものとなったが、決して裕福になって生活が変わったわけではない。二人は大金持ちになりたいと望んでいたわ

けではなかった。正月の用意をしたいというつましい願いが果たされたことで、生活が変わったわけではないが、二人は満足し幸せな時間を過ごすことができたのだろう。「と」とあるので、この話が伝え聞いたものであることを示している。

三 考察

以前、ある大学の先生が大学院の授業の中で「なぜじぞうさまはじいさまのうちが分かったのか？おかしいではないか」と、ひどく憤ったという話を聞いたことがある。「じぞうさまだから超能力があったのです」とある大学院生が発言し、「そんなことはどこにも書いていない」と先生が答えるやりとりがあったと聞いて、国語教育の議論は面白いものだと感じた。国語の授業でなければ、「かさこじぞう」の一部分について、鼻息を荒くしてまじめに議論することはないだろう。生活の中では起こらない類いの議論に夢中になることができることが文学教材の授業の魅力の一つなのかもしれないと考えたためである。ここではじぞうさまがなぜじいさまのうちを見つけたことができたのか、改めて考えてみたい。

確かにじぞうさまは「じいさまのうちはどこだ ばあさまのうちはどこだ」と歌いながら来ているのに、じいさまが返事をしないにも関わらず迷うことなくじいさまのうちの前で荷物を下ろし始めている。最初からじいさまのうちの場所を知っているなら、歌とはいえ「じいさまのうちはどこだ」と言う必要はなかっただろうし、表札でも出ていて見つけたのだとしても、そのような記述がなく、理由として弱い。実はかつてじいさまが返事をする本文があった。

「かさこじぞう」は一九六七年に絵本が刊行され、昭和五二年度版（一九七七年度）から教科書に掲載されたが、五五年度版、五八年度版と掲載が重ねられるにつれて、各社で作者の承諾の上書き換えが行われ、複雑な種類の本文が生まれた。東京書籍版の教科書編集に岩崎京子自身も関わっており、岩崎は会議の中で表現の矛盾が指摘され、それに応じて自らも書き換えていったと回想している。その後昭和六一年度版の掲載にあたって、作者から教科書会社各社に要請があり、統一した本文が使われることになった。現在掲載されているものや絵本として出版されているものは、すべて統一された本文が用いられている。本文変更の経緯については、廣添智子（一九八三、今林久（一九八八）、岩崎京子（一九九一）、鶴田清司（二〇〇一）、吉原英夫（二〇〇三）、武藤清吾（二〇一〇）に整理されている。

多くの変更箇所があるが、ここでの問題に関わる部分を挙げると、以前の本文にあったものの統一版の本文で削除されたのが次の一文である。

じいさまが、思わず、「ここだ。ここだ。」と大声出したら、うた声はぴったりとまりました。

鶴田（二〇〇一）は、この変更について「じいさまの無欲さをよりいっそう強めようとする」という評価を紹介した上で、「じいさまが『ここだ。ここだ』と大声を上げた部分も、『じいさまのうちはどこだ』ばさまのうちはどこだ』に自然な形で対応している」とし、「改稿前の本文の方が、庶民のたくましさ、生きる力のようなものが表れていて、話にリアリティが出てくるように思われる。」（三三三頁）と指摘してい

る。つまり、じぞうさまがどうしてじいさまのうちが分かったのかという謎は、じいさまの無欲さという人物像を強調するために、返事をする一文を削除したために生まれたものだった。現在は作者によって統一された本文が確定しているため、以前の本文に戻すことは難しいが、この一文がもともあつたと考えると、じぞうさまがどうしてじいさまのうちが分かったのかという謎は解決するように思われる。

しかしながら、たとえじいさまが「ここだ。ここだ」と返事をしていたとしても、じぞうさまの不可解な言動は残る。「ところが、そりを引くかけ声は、長じやどんのやしきの方には行かず、こつちに近づいてきました。」とあり、じいさまが返事をする前から、じぞうさまはじいさまのうちを目指して迷わず向かってきている。また「じいさまのうちはどこだ。ばさまのうちはどこだ」と、知るはずのないばさまの存在を歌っている。さらに、「米のもち、あわのもち」「みそだる、にんじん、ごんぼやだいこんのかます、おかざりのまつなど」とじいさまとばあさまが手に入れようとしたものを運んできている。これらはじいさまが返事をしたとしても説明しにくい。

このように考えると、じぞうさまはやはり「超能力」らしきものがあり、すべてを見通して知っていたと考えるしかない。じぞうさまは、じいさまが返事をするかどうかに関わらず、じいさまのうちの場所を知っていた。また「さぞ、つめたがるうのう。」とかさここと手ぬぐいをかぶせてくれたじいさまだけでなく、そんなじいさまに「さぞつめたかったろうの。」と接したやさしいばあさまにも受け取ってもらおうとたわらを運んできた。さらにじいさまとばあさまが、お金持ちになりたいというような願望ではなく、「よいお正月」を迎える準備をしたかったという願望も知っていた。

宅急便のコマーシャルに「場所に届けるんじゃない。人に届けるんだ。」というコピーがあるが、じぞうさまもじいさまとばあさまの二人の気持ちに添えて、二人に届けるためにたわらを運んできたのだろう。

文献

- 今林久、「小学二年 かさこじぞう（岩崎京子）」、浜本純逸、東和男、今村久編、『作品別文学教育実践史事典 第2集・小学校編』、明治図書、一九八八年、三九〇～四八頁
- 岩崎京子、「児童文学、教科書にのる」、日本児童文学者協会『日本児童文学』、第三七卷第九号、一九九一年、一六〇～一九頁
- 鶴田清司、「まずしさ」と「やさしさ」の世界、田中実、須貝千里編、『文学の力×教材の力 小学校編2年』、教育出版、二〇〇一年、二二〇～二二七頁
- 廣添智子、「小学二年 かさこじぞう（岩崎京子）」、浜本純逸、森田信義、東和男編、『作品別文学教育実践史事典』、明治図書、一九八三年、五三〇～五九頁
- 武藤清吾、「かさこじぞう」の授業実践史、浜本純逸監修、『文学の授業づくりハンドブック 第一巻』、溪水社、二〇一〇年、一〇一～一二五頁
- 吉原英夫、『かさこじぞう』のテキストと教材文について、北海道教育大学語学文学会、『語学文学』、第四一号、二〇〇三年、二三～三一頁

